北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

絵と言葉の反自立性に着目した絵本の構造分析：『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』を例に

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2024-03-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小田, 康陽, 花坂, 歩
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000135

絵と言葉の反自立性に着目した絵本の構造分析

― 『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』を例に ―

小田　康陽 ・ 花坂　歩

キーワード　絵本　絵と言葉　不意討ち的到来

1　はじめに

本稿では、『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』(ジャーヴィス作、万木森玲訳、岩崎書店、2023)を取り上げ、絵と言葉の相補性を明らかにする。そしてそれが後述する不意打ち的到来を引き起こす重要な要件となることを示す。本作品は、Oscar's Book Prize 2023 の受賞の他、Guardian 紙の Best Children's Books 2022、絵本ナビ NEXT プラチナブック(2023 年 2 月)にも選ばれている。作者のジャーヴィスはイラストレーター、アニメーション・ディレクター、ウェブ・デザイナーとしても活躍するイギリスの絵本作家である(注1)。

2　作品の構成

この絵本は、横組み左開きの見開き 15 場面で構成されている。文字と絵は、左から右へ、上から下へと流れていく。絵は全体的に淡く、おだやかな色調である。物語が展開される場所は明記されていないが、学校や保育園のように、複数の子どもたちが集まって、ともに過ごすような場であると考えられる。登場人物は「デイビット」、「ぼく」、14 人の子どもたち、「ジョーンズせんせい」である。

論述の便宜上、見開き 15 場面を 4 つの展開部に分け、以下のようにタイトルを付けた。

第1展開部	第 1 場面	「デイビット」と「ぼく」の登場
	第 2 場面	みんなに好かれる「デイビット」
	第 3 場面	「ぼく」や他の子どもたちと遊ぶ「デイビット」
第2展開部	第 4 場面	「デイビット」の「はな」の異変
	第 5 場面	「ぼく」に姿を見せなくなった「デイビット」
	第 6 場面	翌朝、「ぼうし」を被ってきた「デイビット」
	第 7 場面	「はな」がとれ、枝だらけになった「デイビット」
第3展開部	第 8 場面	他の子どもたちから距離をとられる「デイビット」
	第 9 場面	「デイビット」のための「はな」作り
	第 10 場面	「デイビット」に自作の「はな」を渡す「ぼく」
	第 11 場面	他の子どもたちからも「はな」を渡される「デイビット」
第4展開部	第 12 場面	再び咲き始める「デイビット」自身の「はな」
	第 13 場面	次々と咲く「デイビット」自身の「はな」
	第 14 場面	自作の「はな」をとっておく「ぼく」
	第 15 場面	「デイビット」と「ぼく」は一番の友達

本作品の「デイビット」の頭には、きれいな「はな」が咲いている。「デイビット」は優しくて、みんなに好かれている。「デイビット」と「ぼく」はよく一緒に遊んでいて、楽しい日々を送る。そこまでを第 1 展開部とする。

ある日、「デイビット」の「はな」に「ぼく」が水をやっていると、「はなびら」が一枚、また一枚ととれ始めた。次

の日、「デイビット」は初めて「ぼうし」を被ってやって来た。「デイビット」の頭は枝だけになってしまっていた。そこまでを第 2 展開部とする。

枝だらけになった「デイビット」を他の子どもたちは危ないからと敬遠した。しかし、「ぼく」は「はな」の絵を描いて、「デイビット」に新しい「はな」をあげた。一人でずっと作っていると、他の子どもたちも手伝ってくれるようになり、段々と前と同じ「デイビット」に戻っていく。そこまでを第 3 展開部とする。

ある日、「デイビット」の頭に「はな」が再び咲くようになった。次から次へと「はな」が咲き、「デイビット」の頭にはたくさんの「はな」が咲いている。「ぼく」たちが作った「はな」はいらなくなったが、「ぼく」は「デイビット」をいつでも助けられるように、作った「はな」をとっておくことにした。「ぼく」の一番の「ともだち」として。そこまでを第 4 展開部とする。

3 人物についての検討

全 15 場面における登場人物の登場回数は、「デイビット」が 12 回、「ぼく」が 13 回、14 人の「子どもたち」(A～N)の内、Aが 5 回、C・D・E・F・G・I・J・Kが 2 回、B・H・L・M・Nが 1 回、そして、「ジョーンズせんせい」が 2 回である。「デイビット」と「ぼく」が 2 人そろって登場する回数は 10 回、「デイビット」が単独で描かれる回数は 2 回、「ぼく」が単独で描かれる回数は 3 回である。

「デイビット」(図1)は、頭にきれいな「はな」が咲いている少年である。その「はな」の色は、赤、青、黄、紫、緑など複数の色で、絵本全体の淡く、落ち着いた色調とはやや異なり、はっきりとした色づかいがなされいる。花弁がとがった「はな」や花弁が丸い「はな」、葉も見られる。第 7 場面ではその「はなびら」が全てとれてしまい、「こえだ」が生えているような状態になった。その後、「ぼく」や他の子どもたちによって手作りの「はな」がもたらされる。以前には見られなかった型紙で切り取ったような形の花弁を持った「はな」も描かれている。「デイビット」の性格は、「ふんわりしててやさしい」、「みんな、デイビットがだいすき」とある。優しい性格でみんなから好かれているようである。「ぼく」と一緒に描かれることが多く、「ぼく」とは特に仲が良いと考えられる。

図1 デイビット

「ぼく」(図 2)は茶髪の少年で、「デイビット」とは「いちばんのともだち」と語る。物語は「ぼく」の一人称語りによって進んでいく。「デイビット」とはいつも一緒に遊ぶ仲で、「デイビット」の「はな」に水をやることもある。「はな」がとれてしまった「デイビット」に、作中で唯一近づいて一緒に遊ぶ様子が描かれている。さらに、「デイビット」に折り紙で「はなびら」を作ってあげたり、それが不要になっても取っておいたりする。「ぼく」は「デイビット」のことが大好きであり、「デイビット」想いの少年である。

図 2 ぼく

14 人の子どもたち(次頁、図3)はそれぞれに異なる特徴をもっている。Aはコーンロウの少女である。「デイビット」と「ぼく」を除けば、最多の 5 回の登場である。第 2 場面、第 3 場面、第 6 場面、第 8 場面、第 11 場面に登場する。第 8 場面には、Aの他にC・Fが登場するが、他の 2 人の目が釣り目気味に描かれているように見えるのに対して、Aは丸めの目で描かれており、不思議

図 3　14 人の子どもたち（A～N）

そうな感じや「デイビット」を心配している様子が読み取れる。Bは金色の長髪で青い目を持つ少女である。第 2 場面に 1 回のみ登場する。左手に絵筆を持っているため左利きと思われる。Cはアフロヘアの少年である。第 2 場面と第 8 場面に登場し、第 8 場面では段ボール箱の中に乗り込み、釣り目気味の目で「デイビット」を見る。Dは赤い眼鏡をかけた少女である。第 2 場面と第 6 場面に登場し、第 2 場面では左手で絵筆を持ち、第 6 場面では右手で青い人形を持っている。Eは車いすに乗った少女である。第 2 場面と第 6 場面に登場し、第 6 場面では自分で車いすを動かしている様子が描かれる。Fは黒色の長髪でそばかすがある少女である。第 2 場面と第 8 場面に登場し、第 8 場面では釣り目気味の目で「デイビット」を見る。Gはお団子ヘアの少女である。第 2 場面と第 11 場面に登場し、第 11 場面では少し大きめの「はな」を「デイビット」にあげている。Hは第 2 場面のみに登場し、机の下に入り込んでいる少年である。他の子どもたちに比べ、やや幼く描かれている。 I は金色・短髪の少年である。第 2 場面と第 6 場面に登場し、第 6 場面ではピンク色の紐のようなものを「ジョーンズせんせい」に見せている。 J は赤髪を後ろでひとつ結びにした髪型の少女である。第 2 場面と第 6 場面に登場し、第 6 場面では顔の正面が描かれ、「ぼうし」を被っている「デイビット」を怪訝そうな表情で見つめる。Kはウェーブがかかった金色・短髪の少年である。第 3 場面と第 6 場面に登場し、第 3 場面では「デイビット」と仲の良さそうな様子が描かれる。Lはウェーブがかかった茶色・短髪の少年である。第 11 場面のみに登場する。Mは金色の長髪で黒い目を持つ少女である。Lと同じく第 11 場面のみに登場する。「デイビット」に複数の「はな」を渡そうとしている様子が描かれる。Nは、赤と黒が混ざった髪色で、長髪の少女である。L・Mと同じく第 11 場面のみに登場し、「デイビット」には青い「はな」を作って渡している。

「ジョーンズせんせい」（図 4）は、黒色の短髪の女性で、16 人の子どもたちの教師である。第 2 場面と第 6 場面に登場し、第 2 場面では緑色のエプロンを着用し、第 6 場面では白色のエプロンを着用している。第 2 場面において、「ジョーンズせんせいだって、はなのせいでときどきくしゃみをしているけど、デイビットがだいすきだ」と語られている。第 7 場面では、「へやにはいるとき」、「ジョーンズせんせい」が「コートをぬいで、ぼうしやマフラーをとりましょう」と言ったことがきっかけで、「デイビット」は、みんなに「はな」がとれてしまった姿を見せることになる。「ぼく」が「デイビット」の「はな」を作る際、「おえかきのどうぐ」と「はさみ」を貸したのは「ジョーンズせんせい」である。

図 4　ジョーンズせんせい

4 2人の主人公についての検討

この作品において、登場回数が突出して多いのは「デイビット」と「ぼく」である。その 2 人の中でも、視覚的に目を引くのは、「デイビット」である。第 1 展開部から第 4 展開部の「デイビット」に共通している点は、まず、頭に「はな」が咲くということである。咲いている状態と「はな」がとれた状態とがあるものの、頭に「はな」が咲くという設定は変わらない。次に、優しい性格だということである。第 1 展開部では「デイビットは、ふんわりしててやさしい」、第 2 展開部、第 3 展開部では「はな」がとれてしまい、精神的に不安定になっているにもかかわらず、誰かにあたるような様子はなく、「ぼく」以外の子どもたちに敬遠されても怒ることはない。第 4 展開部では、みんなが作ってくれた「はな」に対して笑顔を見せる。「ぼく」に対しては、手を引いて遊んだり(第 13 場面)、肩を組んだりしている様子が見られる(第 15 場面)。

各展開部には特徴的な姿もある。第 1 展開部と第 4 展開部終盤で咲いているのは「デイビット」自身から咲いた「はな」である(図 5)。そして、第 2 展開部の後半を中心に、頭が枝だけになってしまう(図 6)。第 3 展開部で咲いている「はな」は、「ぼく」たちによって作られたものである(図 7)。第 4 展開部で「デイビット」から「はな」が咲き始めたときには、その「はな」と「ぼく」たちが作った「はな」が共存している(図 8)。こうした「デイビット」の様子は、物語の展開に大きく関わるものでありながら、ほとんどが絵のみで表現されている。

「デイビット」は、この物語の絵において明らかに目立つ色づかいがされ、「デイビット」の頭の「はな」の状態の変化にあわせるように物語が展開する。しかし、この物語は「ぼく」の一人称語りによって展開する。「ぼく」から見た「デイビット」や「デイビット」との思い出、「デイビット」のために「ぼく」がしてあげたことや思っていることが書かれている。それは、物語の最後まで一貫しており、「デイビット」自身の心情が直接的に言葉で書かれることはない。「デイビット」が誰かと一緒に描かれるときは必ず「ぼく」といるという点も本作品が「ぼく」から見た「デイビット」という視点で描かれているからだと考えられる。この絵本において「デイビット」と「ぼく」は、不可分な存在である。

図 5 もともとの「デイビット」

図 6 枝だけになってしまった「デイビット」

図 7 作られた「はな」の「デイビット」

図 8 「はな」が共存する「デイビット」

5 物語の山場についての検討

この作品には 3 つの山場が設定されていると考えている。一つは、「デイビット」の「はな」がとれた第 7 場面、もう一つは「ぼく」が「デイビット」の頭に「はな」をつける第 10 場面、そして、子どもたちが「デイビット」のために「はな」を作る第 11 場面である。

「デイビット」の「はな」は第 2 展開部においてとれてしまう。水やりをしていた時に、「ぼく」は 1 枚の「はなびら」が手に落ちたことに気付く。その後、「ぼく」が遊ぼうと言っても、「デイビット」はそれに応じなかった。そこには、落ちた「はなびら」だけが描かれ、それを 1 人で拾う「ぼく」が描かれる。「ぼく」が単独で描かれるのはここが初めてである。次の日、「ぼうし」を被った「デイビット」が子どもたちの列の最後尾でやって来る。それを

列の先頭にいる「ぼく」が心配そうに見つめる。楽しい日常の様子が描かれた第 1 展開部から、徐々に不穏な気配を強めていく展開によって、第 7 場面は物語上のネガティブな山場となっている。

枝だけになった「デイビット」(図 6)に「ぼく」以外の子どもは近づこうとしない。「けがをするかもしれないから」という理由が書かれるが、3 人の子ども(A・C・F)のうち 2 人(C・F)は釣り目気味の目をしており、嫌悪感すら読みとれる。

次の場面では「デイビット」のために新しい「はな」を作る「ぼく」の様子が描かれる。「ぼく」は「ジョーンズせんせい」に「おえかきのどうぐ」と「はさみ」を貸してもらう。そして、「こんなに　できた！」と言う。それを読むだけでは何を作っているのかよくわからないが、絵を見ると、何となく見覚えのある「はな」のようなものを満足気に見つめる「ぼく」がいる。ここではじめて、読み手は絵と言葉の内容を合わせて、「デイビットのためにはなびらを作ったのではないか」と気づき、物語の好転を予感する。そして次の場面で、「ぼく」は「デイビットにいろをもどしてあげる」と言って、「デイビット」のために作った「はな」を頭に付ける(図 9)。この第 10 場面がポジティブな山場である。

ネガティブな山場では、枝だけになった「デイビット」が見開きの右ページにのみ描かれているのに対し、ポジティブな山場では、見開きいっぱいに「デイビット」と「ぼく」の二人が描かれる。ネガティブな山場の言葉は 9 行、ポジティブな山場の言葉は 1 行である。絵と言葉の構成においても、対比的な構造を持つ 2 つの山場になっている(注 2)。

図 9　ポジティブな山場の「デイビット」と「ぼく」

そして、第 3 展開部の最後にあたる第 11 場面は、読み手に安堵と困惑がもたらされる山場である。この場面では、「ぼく」の「はな」作りにA・G・L・M・Nが参加する。「デイビット」は出来上がったたくさんの「はな」をにこやかな表情で受け入れる(次頁　図 10)。作品の言葉も、

ぼくはデイビットにあげるあたらしいはなをずっとずっとつくってた。
みんなもてつだいたいって。
だからみんなとつくった。

まえとおんなじデイビットにもどったきがする

とあり、なんとも和やかである。この場面は、「ぼく」たちの優しさを読み手に直接的に伝えてくる。

一方で、この場面には読み手に一抹の不安や疑いを抱かせる言葉もある。それは「ほとんど」である。上掲の「まえとおんなじデイビットにもどったきがする」の後に、「ほとんど」という言葉が行を変えて置かれている。この「ほとんど」によって抱かれる不安や疑いは、作品を最後まで読んでも払拭されない。この場面は、この作品の中で唯一、絵と言葉のイメージが相反している。この「ほとんど」をこの場面の言葉の意味だけで考えると、「デイビット」に新たにもたらされた「はな」は、あくまでも模造品・代替品であり、本当の意味で「デイビット」の「はな」が復活したわけではないとも解される。あるいはまた、「デイビット」と「ぼく」以外の子どもたちに着目して考えてみると、第8場面で「デイビット」に嫌悪感を醸し出していたC・Fは、この第11場面には登場しない。言葉では「みんなとつくった」と書かれつつも、絵では、子どもたち 14 人全員が描かれているわけではない。さらに深読みすれば、描かれているA・G・L・M・Nのうち、5 人中 3 人(L・M・N)がこの第 11 場面のみの登場である。普段から「デイビット」と一緒に遊んでいるわけではないから、「ぼく」の行動にも賛同しやすかったと考えられなくもない。つまりは、「デイビット」と「ぼく」以外の子どもたちの関係性は以前のような関係に完全に戻ったわけではないと考えることもできるということである。

いずれにしても、この第 11 場面は読み手に様々な憶測を想起させる。絵と言葉の相反も含めて、本作品においては異質な場面であり、山場の一つとして考えてよいだろう。

図 10　みなで「デイビット」のために「はな」を作り、差し出す第 11 場面

6　この絵本における不意討ち的到来性の検討

『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』は、「デイビット」と「ぼく」による関係性の変化を軸に物語が進んでいく。他の子どもたちや「ジョーンズせんせい」と楽しく過ごす「デイビット」と「ぼく」、頭の「はな」がとれたことをきっかけに暗転する「デイビット」と「ぼく」の関係、自作の「はな」を作って、状況の改善を試みる「ぼく」、みんなが作った「はな」で彩られる「デイビット」、そして「デイビット」自身の「はな」が頭に咲き戻り、さらに

深い友情で結ばれる「ぼく」と「デイビット」。その変化を生み出す起点となっているのが、頭から小枝を生やし、そこに「はな」を咲かせている「デイビット」である。

久保田(2012)は、絵本は「人間の力を超えた場所の描写を可能にしている」と言う。絵本を教材にしたとき、学習者である子どもだけでなく、授業者である教師自身も現実世界とは異なる世界観で考えることを求められる。このことは、学習者と授業者が対等な立場で対峙できることを意味する。授業者がもつ前提や常識、経験を超えたところで解釈が行われるからである。

授業において、教師と子どもは他者として対峙している。その対峙において、「自己触発」はより強く生じる。ここでいう「自己触発」とは、それぞれに「自分の活動によってこのように自分自身が触発される」(中田:1996、p.100)ことを言う。教師は、子どもの発言を取り上げたり、ノートやワークシートの言葉を拾い上げ、子ども自身の経験を「経験済みにする」(中田:1996、p.103)役割を担っている。いうなれば、自己触発を強固にする役割である。さらには、子どもの自問自答や自己変容を認め支えたり、教材へのかかわり方を温かくそのまま受けとめることで、子どもの自己肯定感を保障する役割もある。そこには強固な信頼関係も構築されるだろう。こうした受容に支えられた信頼関係が「不意討ち的到来」を引き起こすための重要な要件となる。

中田(1996)は、「対話哲学では、他者はつねに不意討ち的到来、あるいは不意討ち的未来として私に出会われてくる、とされている」(p.95)と述べる。教師が事前に想定した子どもの反応や理解の様子の範囲内で進行する授業には、「不意討ち的到来」は起きにくい。新たな創造や子どもとの未知なる出会いが生起するためには、教師の想定の範囲の外にまで、思考を拡張させなければならない。

絵本が表現する世界観は現実世界とは異なり、正解を定めにくい。例えば、学習者の中には、第 1 場面で頭に「はな」を咲かせている「デイビット」を見て、驚きを感じる者もいれば、第 2 場面の子どもたちが机についている場面を見て、人々の多様性を感じる者もいるだろう。第 3 展開部の「ぼく」の行動を見て、優しさや友情について考える者もいれば、第 8 場面の他の子どもたちの行動を見て、葛藤を感じ考える者もいるだろう。あるいは、1 人ひとりの行動描写に注目して、「デイビット」に対する感情の違いを考える者もいるだろう。『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』は、絵で示されていることが言葉になっていなかったり、絵だけでは想像しきれない心情などが言葉で説明されていたりするために、絵本全体から形成されるイメージは学習者の着目の仕方によって多様になるようにできている。

香曽我部・鈴木(2012)は、絵本には「自覚的になされる反自立」(p.19)があると述べている。「反自立」とは、「一方が欠けると、表現として不完全なものとなってしまう」(p.18)ということである。絵本は、単に絵と言葉によって構成されるものではなく、絵と言葉のそれぞれが相補的関係性によって結びつくことによって成立している。その関係性は「自立していないもの同士のもたれ合い」(p.18)というものではない。

『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』は、「デイビット」を視覚的な注目を集める登場人物としながらも、「ぼく」に出来事や心情を語らせる。語りは常に「ぼく」目線である。そのことが「デイビット」の心情把握を困難にするのだが、それが絵本の絵と言葉の反自立を強めている。「一方が欠けると、表現として不完全なものとなってしまう」という関係性である。子どもたちは、その反自立に着目した授業を受けることによって、直感的に気づくこともあればそうでないこともあるだろう。子どもたちが気づいていないのであれば、授業中に教師がそこに気づかせることも有効である。子どもたちが、絵と言葉の反自立性に気づいたとき、「デイビット」の心情を探ろうとする子どももいれば、なぜそのような形式がとられているのかについて考える子どもも出て来るだろう。そこで生じる違いや不完全性が重要である。絵や言葉で書かれていないこと、例えば「デイビット」の心情について、絵や言葉からなる暗示的要素について考え、それを授業において交流し、他者の考えに出会い、新たな暗示的要素に気づく。こうした一連の現象が授業における不意討ち的到来を連鎖的に誘発する。

7 おわりに

本稿ではジャーヴィス作の『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』(岩崎書店、2023)を取り上げ、絵と言葉の相補性ならびに不意打ち的到来について論述した。本稿で述べた不意打ち的到来は、読みの現象においてきわめて重要なものであると考えている。「不意打ち」という言葉が意味するように、それは思いがけない現象である。個人の読書において起こる「不意打ち的到来」、他者とともに読むことで起こる「不意打ち的到来」、そのどちらも自己を刷新することにつながる。『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』はそうした「不意打ち的到来」の訪れ、引き起こしを期待できる優れた作品である。引き続き、このような作品の発掘及び解明に取り組んでいきたい。

附記　本稿における作品解釈は小田独自のものである。花坂は全体の構成を提案するとともに、論述の精緻さを高めるための問いを小田と共有し、協議した。本稿は両者による共著であり、不可分である。なお、本研究は JSPS 科研費 JP19K02735、JP21H00868 の助成を受けての成果である。

注

1 「岩崎書店」のホームページ(https://www.iwasakishoten.co.jp/book/b617491.html、閲覧:2024/02/06)の他、「絵本ナビニュース(2023.01.24)」(https://style.ehonnavi.net/ehon/2023/01/24_851.html、閲覧:2024/02/06)「絵本ナビ」(https://www.ehonnavi.net/author.asp?n=35155、閲覧日:2024/02/06)を参照した。

2 本稿では詳しく述べていないが、読み手の期待や不安を徐々に強めていく上で、本作品には「ページ・ターナー」が効果的に用いられている。術語としての「ページ・ターナー」については、藤本(2007)を参照した。

引用・参考文献

久保田健一郎(2012)　絵本と子どもの人間形成論:他者との邂逅の不可能性と可能性, 大阪大学教育学年報, 17, 89-100

香宗我部秀幸・鈴木穂波(2012)『絵本を読むこと「絵本学」入門』翰林書房

中田基昭(1996)『教育の現象学ー授業を育む子どもたち』川島書店

藤本朝巳(2007)『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部

引用図書

ジャーヴィス(作)・万木森玲(訳)(2023)『ぼくのともだちは、あたまにはながさいている』岩崎書店

(おだ　こうよう／大分大学)
(はなさか　あゆむ／大分大学)